

「竹のぼり」に見る幼児教育論

学校法人帯広葵学園 理事長 上野敏郎



今年も運動会シーズンがきました。他の幼稚園の運動会を見たことはありませんが、帯広葵学園の運動会には伝統的種目「竹のぼり」があります。私は、この競技に強い関心を持っています。今更説明は無用ですが、「竹のぼり」は子どもたちが自分の持つ運動能力や知恵を振り絞りながらつっぺんの鈴を目指すのです。その姿も感動的ですが、それ以上に私が関心を持つのは、5人、6人の子どもたちが一斉にのぼる状況を瞬時に確認して発する先生の言葉と動きです。

先生はそれぞれの子どもが全く違う状況にあるのに、そのそれぞれの子どもにタイムリーに自分の直感的感性で声を届けるのです。その先生の声に感動するのは、そして、その声は、すべての保護者に届きます。我が子が心配で、心配でたまらない保護者の耳に、我が子を励ます先生の声が聞こえるのです。保護者がうれしくないはずがありません。その光景を見ると、その声は、どんなに名の通ったアナウンサーでも司会者でも真似のできないものだと思えます。こんな嬉しいことはありません。そこに、幼児教育に携わる教育者としての自信と個性を見ることができ、私にはこれが「たまらないのです」。

さて、私たちは教育者であり保育者です。「竹のぼり」が私たちに仕事にどう関わることができる必要があります。

- ①竹のぼりは、「登ろうとする意志」、「途中で工夫する姿勢」を大切にするとスポーツです。
- ②竹のぼりは、「登れた子」「途中まで登った子」「怖くて登れなかった子」「応援していた子」と言った違いを認め合うスポーツです。
- ③竹のぼりは、「できた子」「できなかった子」を見るのではなく、「どう感じたか」「何を工夫したか」「どんな気持ちで臨んだか」を振り返ることを求めるスポーツです。これは私が「竹のぼり」を学習した資料に書いてあったことです。実践の場に役立ててもらいたいと思います。